

氏名	山本 浩史
学位	博士
専攻分野の名称	文化科学
学位授与番号	博甲第4182号
学位授与の日付	平成22年 3月25日
学位授与の要件	文化科学研究科社会文化学専攻 (学位規則(文部省令)第4条第1項該当)
学位論文題目	石井十次の孤児教育思想
学位論文審査委員	主査・教授 小畑 隆資 教授 荒木 勝 教授 中富 公一 教授 姜 克実

学位論文内容の要旨

1. 本論文の意図と視点

本論文は、岡山孤児院を創設して孤児教育を基軸に孤児救済にとりくんだ石井十次（1865－1914）の「孤児教育思想」を、天職観の変遷を軸に解明することを課題としている。

先行研究において、石井の生涯にわたって孤児教育の思想に焦点をあてて検討した研究は、これまでにない。研究者の関心にかかわる範囲内で、一定の時期の特定の言説が部分的に検討されているに止まっている。

また、石井研究においてもっとも基礎的で基本的な史料である『石井十次日誌』を、孤児教育思想という視点からその全範囲を渉猟し検討した研究も、これまでにない。

本論文は、『石井十次日誌』を中心に、その他の刊行されている伝記や研究書のほぼすべてを参照して、石井の孤児教育思想を石井の内面からその全貌を明らかにしようとするものである。

では、どのような視点から石井の孤児教育思想を解明しようとするのか。本論文は、これまでの先行研究を丹念に検討するなかで、孤児救済の方向をめぐって、すなわち、孤児教育の目的としての養成さるべき人物像をめぐって、大きく二つの潮流があることを検出する。一つは、姜克実氏の、現実社会の救済事業としての「肉体を救う「慈善」」というより、信仰上の事業としての「靈魂を救う「教育」」が基本に置かれており、「神の僕」の養成が、石井の孤児教育の目的であったとするものである。いま一つは、田中和男氏の、「国家主義的」な「国民統合」の視点から、孤児救済事業を評価するものである。この両極の間に他の諸研究は位置づけられるが、総じてこの両者の関連を意識してそれ自体を問題として問うという姿勢は、その他の諸研究では弱かったという。そこでは、石井の事業を孤児教育に焦点をあててその救済の性格を問う姿勢がそもそも弱かったからであり、その点で、真正面からその点を問うた姜氏の問題提起を高く評価している。しかしながら、姜氏の場合にも、冒頭で指摘したように、石井の孤児教育思想の全時期にわたっての実証はなされていない。しかも、石井の教育思想を一貫してかつ根底において支えていた天職観そのものについては、それほど関心は払われてはいない。

そこで、本論文は、両極に分裂している石井の孤児救済事業についての研究状況にあって、そうした判断を下すにはいまだ十分な実証が為されていないとして、『石井十次日誌』を中心に孤児教育の全時期にわたって石井の言説を分析していくことを試みる。その際、上記のような研究状況へ反省から、その視点は以下のように措定される。

- (1) 石井の孤児教育思想の具体像について、孤児とは何か、孤児に何を教育しどのような人材を養成しようとするのかについての、石井自身の認識とその変遷を明らかにする。

- (2) その教育思想の具体像を、石井の天職観とその変遷との関連において検討する。
- (3) 上記 (1) (2) の変遷に即して、石井の孤児教育思想の変遷の時期区分を設定する。

2. 本論文の構成と内容

本論文は、石井自身の認識に即した孤児教育思想の変遷に即した時期区分にほぼ対応させて、以下の1章から5章で構成されている。

序章 研究の目的とその視点について

第1節 研究対象と目的

第2節 先行研究の概要と本研究における論点

第3節 石井十次におけるライフ・ヒストリーの概略

第1章 教育思想と孤児教育観の成立

第1節 教育観の成立

第2節 孤児教育観成立への道程

第3節 孤児教育観の基底にある観念

第4節 天職観の成立

第2章 1890 (明治23) 年前後からの思想形成過程

第1節 1889 (明治22) 年と1890 (明治23) 年におけるパラダイム転換

第2節 1891 (明治24) 年における「神民」、「良民」、「人民」と「良心を手腕に応用する大人物」

第3節 「廢民」「殖民」観念の成立

第3章 ルソーのエミール教育との出会いと実業的独立宣言

第1節 ルソーのエミール教育との出会いとその影響

第2節 自然教育と真正な教育

第3節 独立宣言と思想の俗化

第4章 明治30年代の孤児教育における敗北と思想の俗化

第1節 1897 (明治30) 年から1900 (明治33年) までの孤児教育思想

第2節 貯金教育と営利主義

第3節 日露戦争による孤児教育への影響

第5章 明治40年代における孤児教育の集大成

第1節 明治40年代における孤児教育の概要

第2節 明治40年代初期における孤児教育

第3節 鍬鎌主義と孤児教育

第4節 石井の晩年における孤児教育

終章 石井十次の生涯にわたる孤児教育思想

参考・引用文献

序章については、「本論文の意図と視点」ですでに紹介したとおりであるので省略する。第1章から第5章までの内容は、視点(1)(2)に即して、終章に総括されているので、以下に要点のみを紹介する。

第1期(1884〈明治17〉－1888〈明治21〉)。出発点は現世的救済であったが、キリスト教、とくにプロテスタントとなってからは、宗教的救済と現世的救済が前者が上位にありながら並存する時期とされる。

郷里(宮崎県)に馬原教育会を設立した明治17年は、カソリックに入信していたが、教育目的は、「国家幾分か補被者」の育成で、その教育方法は「昼働夜学」で、対象も「郷里の生計困難な有為の若者」であった。その後、11月には、プロテスタントに改宗。明治20年、岡山孤児院を創設する(以下、すべて岡山孤児院での活動)。ここで救済対象は、孤児が中心に据えられ、「天父の聖意を悦

ばしめるため」と事業の目的が掲げられる。その教育方法は「信仰祈禱主義」と「勤労勤勉」で、養成されるべき人材は「国家の良民」「普通の良民」である。

第2期（1889〈明治22〉－1893〈明治26〉）。現世的救済から宗教的救済へと大きなパラダイム転換があった時期とされる。

事業の目的に「神国の建設」（明治23年）や「理想的社会（地上の天国）」（明治26年）が掲げられ、孤児院を「クリスチャンホーム」（明治22・23年）とすることが目指される。教育方法は「信仰祈禱主義」（明治22年）、「労働学問並行教育主義」（明治23・24年）で、「殖民」による「小天国」の形成が目指される（明治25年）。養成されるべき人物像は、「神の国の良民と有益なる民」（明治22年）、「靈的自由神民」・「日本的自由良民」「世界的自由人民」・「良心を手腕に応用する大人物」（明治24年）、「社会の光塩たる人物」（明治25年）、「理想的国民（信仰心と勤勉）」（明治26年）である。

第3期（1894〈明治27〉－1897〈明治30〉）。ルソーのエミール教育すなわち自然教育により、勤勉で独立自活できる人間、あるいはイエスの如き人物を養成して、理想的に社会を革新することを目指した時期とされる。

エミールを理想として、「エミール主義的自然教育」（明治27年）、「キリスト教的労働主義教育法」（明治29年）により、「一個のクリスチャンを神と社会に献ずる」（明治28年）ことを目指している。1897（明治30）年には、郷里の茶臼原に「理想的孤児院村」を開設する。

第4期（1898〈明治31〉－1906〈明治39〉）。第3期の試みが挫折し、「国家有用の人物」が孤児教育の目指す人物像となった時期。

この時期には、身体が強健で、普通の知識を持ち、意思が堅固で、一つの手芸を持った独立する実力のある人物養成がその教育目標となり、それが「国家有用の人物」（明治31年）育成へと繋がっていく。キリスト教による宗教的救済の信念に関しては、一時、明治31年に「神の国の民」や「光塩たる人物」養成が再び掲げられたりする。しかし、その後、とくに、日露戦争の始まりとともに、「ライオン教育」（明治37年）・「軍隊操練」「軍隊教育」（明治38年）等の教育方法による「戦士的国民」育成へと展開していく。後に（明治44年）になって石井によって、「文部省主義の足下に兜をぬぐこと」となった「敗北の十年」「俗化の十年」と総括される時期である。

第5期（1907〈明治40〉－1913〈大正2〉）。石井の「集大成の時期」とされる。石井の孤児教育が宗教的救済に回帰する時期である。ルソー主義、実業的独立自立への回帰と復活とされるが、ここでは、二宮尊徳への傾斜が著しいのが特徴で、農業本位の「鋤鎌主義」として復活する。また、モルモン教からの影響もあり、現世を農本主義による労働本位の理想的社会に改造する担い手を養成することが教育目標となり、茶臼原に「修道院的孤児院」を拠点とした「理想的農村」建設を目指したとされる。

本論文は、こうしたそれぞれの時期に即して、そのときどきに石井が孤児教育をみずからの使命として「天職」として絶えず自らに確認している状況を克明に検討し、石井における宗教的使命観が「天職」観として展開していることを明らかにしている。

こうして、本論文は、孤児教育による孤児救済が、「キリスト教をベースとした自らの信仰を基本とし、自身の天職観を基軸に置いて、時には現世的価値に重きが置かれ、また時として宗教的価値に重きが置かれながら、孤児教育が実践されたのである」と結論している。

学位論文審査結果の要旨

1. 本論文の評価

本論文は、これまでの石井十次研究においてはじめて石井の孤児教育思想の全体像を明らかにしたものであるとして、高く評価できる。その理由は以下のとおりである。

①石井十次の孤児教育に焦点をあてて、その教育思想を天職観にもとづく教育目標と教育方法を中心にして検証している。また、以下の②の方法とも関連して、石井の孤児教育思想の具体像をその変遷に即して描くことに成功している。

②そのための分析対象として、『石井十次日誌』を全時期にわたって詳細かつ丹念に検討し、石井自身の思想に徹底的に内在することによって、その教育思想を再構成している。その方法は、堅実で信頼できる。

③また、これまでの研究史の到達点を丹念に検証して、孤児の宗教的救済と現世的救済の二つの対立する見解を検出し、その克服を課題として設定して上記①②の問題解明に臨んでいる。そして、その両者の間を揺れ動く石井の孤児教育思想の具体像を、説得力をもって浮き彫りにすることに成功している。

しかしながら、同時に、いくつかの問題点も指摘され得る。

①石井の思想に内在するという点では評価し得るが、同時に、客観的な検証も必要ではないか。すなわち、孤児院経営は石井の教育思想がそのまま実現するわけではなく、孤児院を内外から支えている様々な関係者の意向も無視することはできない。あるいは、いったいどれだけの数の孤児が卒院後、どのような職業についていったのか、そのうちどれだけの割合でクリスチャンとして宗教的使命感をもった者として育てていったのか等の、客観的検証が為されていない。

②石井の孤児教育思想において重要な天職観の変遷についての具体像は描かれているが、その「天」概念についてのより深い検討が必要ではないか。すなわち、石井における「宗教」と「国家」あるいは現世との内的連関は、その「天職」観の「天」概念の検討によって果たされなければならないのではないか。ウェーバーの「天職」概念との比較において、石井のそれがウェーバーのいうプロテスタンティズムとの違いまでは明らかにされてはいるが、なお、さらなる検討が必要ではないか。

以上、二点が本論文の問題点として指摘され得るところであるが、まさにそうした問題解明によって、本論文が詳細かつ丹念におこなった検証があってはじめて可能となる問題定立であり、先に本論文の意義として高く評価した諸点を損なうものではない。以上二点の問題点については、申請者の今後の課題として、その成果を今後に大いに期待するところである。

2. 審査結果

本論文の内容についての審査委員会の評価については上に述べたとおりである。その結果、審査委員会は、本論文について、全員一致で、本論文が博士論文にあたいするものとの結論を得た。